

「ピラトとヘロデからの尋問」

2023年11月29日

そこで、議員たちは皆立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、自分が王たるメシアだと言っております。」そこで、ピラトはイエスに、「お前はユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることだ」とお答えになった。(ルカ23:1~3)

ヘロデの管轄下にあると分かれると、イエスをヘロデのもとに送った。ヘロデもその頃、エルサレムに滞在していたからである。イエスを見ると、彼は非情に喜んだ。というのは、イエスの噂を聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。(ルカ23:7~8)

最高法院は、主イエスから神の子であるとの証言を強引に引き出した。それは、自分を神と同等の者であるとする証言であって、神を冒瀆し、死罪に当たる。神殿当局は、ようやく主イエスを死刑にすることができる状態を作り出した。ヨハネ福音書18章31節に、当局はピラトに対し「私たちには、人を死刑にする権限がありません」と言っているように、死刑の執行権はローマに握られていた。しかし、これは刑法上の執行権であり、宗教に関しては、ステファノは神殿を冒瀆した罪状で、石打ちの刑で殉教している。冒瀆罪により石打ちの刑で、主イエスを死刑にすることができたはずである。ところが、彼らは自分たちの手で死刑を執行することに躊躇した。自分たちの手で執行すると、主イエスに篤い支持を寄せている民衆の反発を買う。そこで、ローマの総督ピラトの手で執行させようと企んだ。しかし、冒瀆罪という宗教的罪状ではピラトは取り上げてくれない。そこで、「この男はわが民を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、自分が王たるメシアだと言っております」と、ローマに反抗する政治的罪状にすり替えて、訴え出た。彼らは陰湿で、狡猾である。ピラトは罪状を聞いて、「お前はユダヤ人の王なのか」と、王としてローマに反逆を企てているのかと問い質した。主イエスは「それは、あなたが言っていることだ」と答えた。ピラトは主イエスを尋問して、政治的反逆を目論む者とは思えなかったので、訴え出た祭司長たちと群衆に、「この男には何の罪も見つからない」と言った。宗教家同士の妬みであることを見通していたのである。すると、当局は「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で扇動しているのです」と、罪状を訴え続けた。これを聞いたピラトは主イエスにガリラヤ人かと尋ね、そうであるならば、ガリラヤの領主ヘロデに裁いてもらおうと、過越祭にエルサレムに滞在しているヘロデの下に送った。

ヘロデは、かつて、兄フィリポの妻ヘロディアを奪い、結婚したことに対し、兄弟の妻を娶うことは律法に反すると抗議した洗礼者ヨハネを怒り、投獄し、宴会の席上、余興のように首をはねたことがあった。そして、主イエスの力ある業を伝え聞いて、ヨハネの生まれ代わりだと思っていた。そのイエスに会い、力ある業を見たいと願っていた。ピラトから送られてきた主イエスに会えたことを喜び、色々尋問したが、主イエスは何もお答えにならなかった。当局は激しい口調で、主イエスの罪状を訴えたが、裁きを下すことはできなかった。ヘロデは、部下の兵士たちと一緒に、嘲り、侮辱を加え、ユダヤ人の王と言うのであればと、きらびやかな衣を着せ、ピラトに送り返した。ピラトもヘロデも主イエスを裁くことができず、責任を果たそうとせず、優柔不断にあしらったのである。